

edulco

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.6 / 2005年 冬

やさしくねやさしくね
やさしくねやさしくね

地球となかよしインタビュー

ねむの木子どもとともに40年 宮城まり子

知っておきたい教育NOW

教員の資質向上と
教員制度改革
教科再編への
実践的試み
田中統治

有田和正のおもしろ授業発見! ⑥

宿泊体験のすすめ 宮川八岐

インフォメーション北から南から

BOOK REVIEW / 現代の家族と次世代を育む力 その2 渡辺秀樹

わたしの「地球となかよし」メッセージ 2004 入賞作品発表

ほつとな出会い タケカワユキヒデ





地球となかよし
インタビュー

ねむの木の子とともに40年 宮城まり子先生（ねむの木学園園長）

ねむの木では、子どもたちを、いつばいの愛情と
いい環境、いい音楽の中に置いてあげたい。

ねむの木学園は昭和四三年創立とい
ことですが、当時、歌手として女優とし
て脚光を浴びていたまり子先生が、どう
して体の不自由な子どもたちの施設をつ
くろうと思われたのですか。

私、いろんな子どもの役をさせていた
だいたため、病気の子もだとか、脳性
麻痺の子もだとかの演技をするために
いろんな病院や施設に勉強に行きました。
東京に整肢療護園っていうのがありまし
て、そこへ七日間通わせてもらったこと
があります。

その時、学校に行ってもよいくらいの
治り方をしている子に会いました。「先生
この子、学校に行かなくていいんです
か？」って聞いたら、「日本には家族がな
い子をお預かりする養護施設があります。
でも、肢体不自由児養護施設というもの
はありません」っていわれてびっくりい
ました。手足にハンディキャップを
もち、精神に遅れをもつ子どもたちは、
「就学猶予」という名のもとに義務教育を
免除されることを知って、義務教育があ
るのなら権利としての教育というのもある
じゃないの。その権利を放棄させられ
るなんていけないと思ったのです。

「じゃあ、どうしてお金持ちが肢体不
由児を受け入れる施設をつくらないの？」
「金持ちはそんな道楽しませんよ」「じゃ
あ、先生はなぜやらないの？」「私はお金
ないですよ」「じゃあ、なぜ国はやらない
の？」「国は法律がないから」って。

「誰もやらないなら、たとえ一人の子で
も二人の子でも、それに気づいた私が、
自分の家ででもやる」って思ったの。法
律も制度もないこの仕事は許可を得るま
でが大変で、長いことかかったなあ。そ
れはそうですね。応援団も何もない、た
った一人きりですもの。

まり子先生のそのようなやさしさや正
義感、いったいどうして身に付いたの
でしょうね。

私が四歳か五歳くらいの時、ちっちゃ
い子に泣かされて家に帰ってきました。
そうしたら母が、「あなたがそんなに泣い
てたら、泣かした子はあなたが泣きやむ
まで辛いよ。泣きやみなさい」って。

またある時、大きい子に泣かされて帰
たら、今度は父が「あなた何かよっぽ
ど悪いことしたの？」って。「私いい子に
してた」っていったら、「何も悪いことを

していないのに、泣かされて帰ってくる
ことがありますか。行って泣かしてらっ
しゃいって。

母と父から、そんなに違うことを教え
られたんだけど、両方につながっている
ものは「むやみやたらに泣いてはいけな
い、相手のことを考える」ということと、
「間違った権力には負けるな」という
ことだったのね。父と母の幼児教育
から、すてきなも
のをもらいまし
た。

今、ね
むの木学
園にはど
ういう子
どもたち
が入って
くるん
ですか？

ほとんど脳性麻痺の後遺症
で手や足が不自由で、その上に考える力
が少ない子です。そして他の病気もも
てますね。

最初からいる子はほとんどが両親がい
なくて、家庭で育てることができない子
でもこの頃は、家庭でのいじめにあつて
手や足が不自由になったり、耳が聞こえ
なかったり、お話ができなかったり、悲

しい子が
多いですね。
ねむの木で
は、そういう子どもたち
を、いつばいの愛情といい環境、いい音
楽の中に置いてあげたいの。だから私は、
いつばい年をとっても生き生きした正し
い考えをする人でありたい。



宮城まり子先生 プロフィール

1927年東京生まれ。歌手、女優、ねむの木学
園園長。1955年歌手デビュー。1968年日本
最初の肢体不自由児養護施設「ねむの木学
園」設立。1988年ヘレンケラー教育賞、
1992年第一回ペスタロッチャー教育賞、
その他、長年の教育活動に対する
多くの賞を受賞。

映画「ねむの木の詩」「ねむ
の木の詩がきこえる」「虹
をかける子どもたち」を
制作・監督。
著書『まり子の校長日記』
（小学館）『神様にえらば
れた子どもたち』（海竜
社）『淳之介さんのこと』
（文藝春秋）など多数。



本誌では、新潟県中越地震被災地の皆様を励ますため、ねむの木学園の協力を得てポスターを作製。昨年11月に中越地域の学校等にお送りした。

みんながここで、生活をともにしているのですね。

はい。ねむの木では学校の顔とおうちの顔とが一緒ですから、子どもが学校でいい子の顔をしないでいいでしょう。だから子どもをよく見られる。私、職員に「当直って、とつてもすてきよ」っていつもいうの。だって、昼間伸びなかつた子どもの足が寝てたらすつと伸びてたり、あんなにいうことを聞いてくれない子が、こんなかわいい顔をして寝てるところを見られるから。

それからちっちゃい子がだだこねて、どつしよつもない時、「おいで」って一緒に寝るの。そうするとサツときて、ピツタリと抱かれてくる子は、やはり母親に抱かれて育つた子ね。でもちよつとからだをはなすのは、やはり何か問題のあつた子なの。その子がガチツとしがみついてくるのを私、待ってる。

そんなにしょつちゅう抱きしめたりできませんよ。だけど、悲しいことがあつたら抱きしめてあげるのが一番いいと思う。

います。そしてホッペにキスするのよ。「大好き、大好き」って。

「やさしくね、やさしくね、やさしい」とは、つよいのよ」という言葉は、先生の教育理念が込められているのですね。

あのね、やさしくしてあげるの。それでもだめだったら、もつとやさしくしてあげるの。そして自分是我慢していつぱいやさしくして、その子がよくなつて心を許してくれたら、自分の願いが達成したことになるでしょ。そのことを強いといつたの。どこまでもやさしくできるところが強いよ。



ねむの木学園では、絵や音楽、詩などの表現活動に力を入れておられますね。

「ねむの木学園」は家庭で、「ねむの木養護学校」は学校ですから、全科目ありますよ。その中で、一人一人の個性を伸ばしてあげたいと思うのです。ゆつくりゆつくりね。

ねむの木の子どもたちは、どんなことがあつてもスポーツの選手にはなれないし、銀行員にもなれない。それなら感性で勝負すればいいと思

います。だから、国語、美術、音楽、ダンス、そして茶道は、二時間から三時間の長時間授業です。集中させたいからどの子も「感じる心」、感性はいつぱいもつてますよ。

みんながすてきな絵をかいていますか、何か指導の秘訣はありますか？

何も教えていません。子どもたちが絵がかきたいと思ってくれるよう努力します。だいたい美術の時間も、唄ったり、お話をしたりする時間になつちやたり、ま、とにかく集中することに熱中します。

黒でいつも絵をかく子がいました。ずっと前ですね。その自閉症の子の絵を見て、「やっぱり自閉症は黒なのね」といつたよその方がいました。私は、その子は手が不自由で力が入らないから強い色を使ったと思つていましたから、ツツジの写生に行った時、黒いクレオンを抜いておいたら、一面のツツジ畑をじつと見てピンクと赤とブルーでかきました。きれいでしたよ。その子は手に力が入らなかつたのです。ただそれだけ。

私たちは子どもの絵から、にじみ出る言葉を感じることが大事だと思います。自分の気持ちを自由にかかせてあげてね、そこに込められた子どもたちのメッセージをよみとってほしいの。

二〇〇五年の展覧会のすごさ、見てよ。「ねむの木ナイヴァート展」です。

美術館をつくる計画が進んでいるようですが、ほかにどんな夢をお持ちですか。

今はねむの木の敷地の中に結婚した人が住める所がないから、もつとつくつてあげたい。それから、お店も、もう少し

たくさんつくりたい。町の中にあるお店もここにきてくれるといいなあ。

出版社だつてつくりたいなあ。ずいぶんねむの木で出版したものがあるんだけど、自分たちで作ると本屋さんには並ばなくて、ここだけでしか売れないでしょ。お金ほしいの。

最後に、学校教育についてご意見を聞かせてください。

子どもたちに渡す教科書の教材をもつ少しデリケートに選んでほしいし、絵もデリケートに選んでほしい。子どもたちの頭の中に一番最初に入るものだから、それは一生忘れないものでしょう？だから教科書は一生とっておきたいようなすばらしいものをあげたいな。私だつたら、やさしい絵が少しあつて、それにやさしい物語、いい言葉が連なつて、小さい本をあげたいな。そうしたら子どもたちは一生大事にするんじゃないかなあ。先生も深く深く考えて、世界のトップをゆくような教育をしてほしいな。先生たちはもつと国際的な見方で子どもたちを見て、英語ができるから外国へ行つても恥ずかしくないといつたのではなく日本人として恥ずかしくないすてきな子になるような教育をしてほしいなあ。それに、悲しいことも辛いことも一人一人がいろんな声で叫んでいるから、それを聞き取る耳がいっぱいほしいなあ。教師つてすばらしい仕事だもの。

ねむの木ナイヴァート展(2005年)

- 4月27日～5月9日 横浜高島屋美術ギャラリー
- 7月23日～8月14日 東京都現代美術館
- 10月18日～10月31日 静岡県立美術館

教員の資質向上と 教員制度改革

宮城教育大学学長 横須賀 薫



■教員制度改革への要請

教育改革の動きがはげしい時代であるが、最近、特に教員をめぐる制度改革や新しい施策が目立っている。表題にした「教員制度」という言葉はまだ熟していないが、これまで養成・採用・研修・人事・処遇などと個々にとらえられていた課題を総合的に把握しようと設定してみたものである。

中央の教育行政関係者には、さまざまな教育制度改革をここ数年にわたって実施し、提言もしてきたが、必ずしも抜本的な改革、改善に結びついていないのではないが、最後はやはり教員であり、ここにすぐれた人材を得なければ改革の実は上がらないだろう、という認識があるように思われる。それが総体としての教員制度改革の焦点が当てられようとしている理由である。

そしてその背景には、公立学校に対する市民や保護者の要求の多様化、それに応えきれない学校への不満や批判の高まりがある。当然ながらそういう不満、批判などは個々の教師に向けられ、さらに批判者側の高学歴化がバックになって、中央、地方の教育行政への不満になっていくという現実がある。

行政側、学校の管理職は、なんとか信頼回復を果たそうとさまざまな打開策を打たなければならなくなっている。総体としての教員制度改革が求められる。

れ、現にさまざまな施策が実施されつつあるのはこの故だろう。

■進む施策の数々

これまで長い間、学校教員の世界、つまり教員界には独特な原理があり、それが他の世界、特に民間企業などとは違う特性や雰囲気をつくっている。それは 平準化 の原理とでも呼んだらよいかと思われるもので、学校という職場における教員間の平等性が何よりも大事にされ、処遇の違いは年功にのみよるとされるようになっていく。

こうした原理は、教職というものが本来発達途上にある児童・生徒を対象とする仕事で、子どもたちの間に差別は許されない、違いへの配慮は一点発達段階によるのみということから導かれていたもので、特に戦後教育において大切にされた原理である。

しかし、長い年月を経て、所期の理念、理想が風化し、現実との緊張関係が薄ればそれは自らの利益の擁護と仲間内のかばいあい転落してしまうのはいずれの時代にも、どんな世界にもあてはまることだろう。残念ながら、近時の教職界の現実をみるとそう思わざるをえない。今、地方・中央の教育行政が打ち出す教員施策をみてみると、こうした 平準化 の慣性や行き過ぎから脱しようとしている努

力とみえる。最近の施策の動向を箇条書きで整理すると、以下ようになる。

- (1) マイナス面を除去しようとするもの
指導力不足教員の認定及び研修
教員採用試験の改善
条件付採用期間の活用
- (2) 教員の資質向上策の強化
教員養成カリキュラムの改善
行政自らによる養成（通称「教員養成塾」）
一〇年経験者研修の創設
教員研修に社会体験、企業研修の導入
大学院就学のための休業制度の創設
教員の評価の促進
- (3) 優秀な教員の表彰制度の研究
人事異動における申し出制の活用（通称「教員版FA制度」）
学校への民間活力の導入
特別非常勤制度の創設
特別免許制度の創設
民間出身校長の採用
- (4) こうした施策の延長上で、本年一〇月に文科大臣から中教審に、教員養成における専門職大学院の在り方について、教員免許制度の改革、とりわけ教員免許更新制の導入について、が諮問された。

■教員養成の専門職大学院

「専門職大学院」はまだ聞き慣れないものかもしれないが、大学改革の促進と該当する専門職の世界を活性化する有力な手法と考えられるようになっていく。ニユースでしばしば取りあげられた「法科大学院」もこの大学院の一種であり、これを教員の養成にも活用できるか、するとすればその在り方はどんなものか、という課題である。

専門職大学院は平成一五年四月一日の学校教育法

改正の施行で制度化されたものであるが、既存の大学院と比較すると次の表のようになる。

既存の大学院	専門職大学院
修士課程 研究者養成と専門職業人の養成が目的 ・学位は修士 ・標準修業年限は2年 ・30単位以上修得し、論文審査に合格 博士課程 研究者養成が主目的 ・学位は博士 ・標準修業年限は3年 ・論文審査に合格	専門職学位課程 専ら高度専門職業人の養成が目的 ・学位は修士（専門職） ・標準修業年限は2年（法科大学院は3年） ・修得単位は30単位以上（60単位が目安） ・研究指導、論文作成は不要、事例研究、現地調査などを主とする ・教員陣に3割の実務家教員を加える

表 専門職大学院と既存の大学院との比較

こうした新制度のもとで、すでに法曹分野、公共政策分野、ビジネス・会計分野、デザイン分野などで新大学院が開設され、あるいはその準備が進んでいる。そして今回の諮問は教職の分野（養成と研修）にもそれを開設してはどうか、という検討を促したものである。

既存の大学院としては、各国立大学の教育学部等に修士課程が設置されているが、その目的が教員の新規養成を担当するのか、既に教職に就いているものの研修を担当するのか、性格付けがあいまいなまま、両者混在のかたちで推移してきた経緯がある。現状をみても、各県に設けられている国立教育学部等の修士課程の入学定員は約三千七百人であるが、そのうち現職教員が占める割合は三割程度で、六割は新規卒業生となっている。

しかも、学部新卒者を受け入れる教育目標も明確でなくて、現状は採用までの時間稼ぎとなっている傾向が強く、「踊り場」と揶揄される所以である。

専門職大学院が教員養成分野で開設される場合は、学部教育の延長、つまり教員養成六年制を志向するのか、現職教員の資質向上のための研修の役割を担うのか、このどちらに力点を置くのか、これがまず検討課題になるだろう。実現すれば、これまで研究

者養成やそれに準ずる専門教育が中心となっていた教員養成大学・学部の修士課程とは異なる実践的、実際の教育を中心とする課程が設立されることになるだろう。

■免許更新制の導入

この課題は記憶している人も多いと思われるが、平成一四年の中教審答申で提言され、その後直截の導入は見送られて、代わりに教職一〇年目研修が創設されたという経緯がある。短日月での再検討提言は異例に属するだろうが、それだけこの課題についての危機感が切迫していることを示している。

現行制度では、教員免許は教職課程の認定を受けた大学・短大で必要な単位を修得すればほぼ自動的に授与され、平成一五年度では、大学の七六％、短大の五四％がこの課程認定を受けている。そこから約一九万件、実人数にして約一万人が免許を授与されているが、公立学校教員に採用されたのは約一万九千人で、この数には近年大きな変化はなく、教員として就職するものは免許取得者の一割強に過ぎない（左図参照）。しかも免許は終身制なので、いわゆるペーパー・ティーチャーの存在が常に問題となっている。

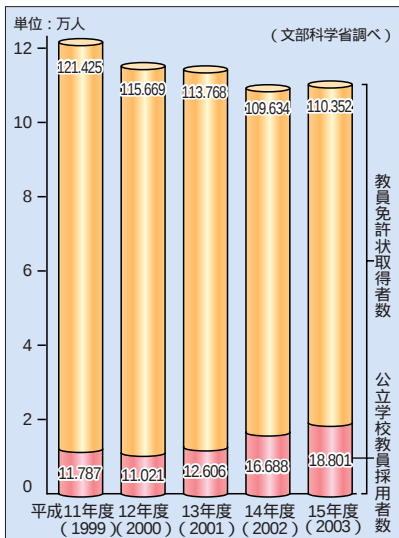


図 教員免許状取得者数と公立学校教員採用者数

この点について、国民の教育への教養の向上に寄与しているという見方もある一方、教職の専門性の確立の障壁になっているともみられている。

更新制という場合、教員免許状所持者すべてを対象とするのか、教員となっているもののみを対象とするのか、授与時の要件を厳しくするのか、で制度設計は大きく変わるが、長年の課題に抜本的検討を加えることが期待されている。

■専門職としての確立を

戦後の教員養成の制度及び内容は、開放制、大学における養成、免許主義、を原理、原則としてきた。それはよく知られているように戦前の養成機関であった師範学校の否定の上に成り立っていたもので、当然一定の進歩性を含み、教員の資質向上に果たした役割も小さくない。しかし、それからほぼ五〇年、最初に述べた教職界の平準化と同様、所期の理念や緊張感は薄れ、大学側の利益擁護や安住を生み出すものに転化してしまっている。

開放制の原理はすでに述べたように免許状の乱発につながり、大学における養成は学問・芸術の断片を教えておけばよいという安易な作風を一般化していった。結局はげしく変化する社会や子どもの実態に迫り、実りのある教育成果をあげることができない状況になってしまっている。

教員養成の専門職大学院と免許更新制は、こうした現状に抜本的な改革を実現する切り札として登場したものだ、私は考えている。それが文字通りの抜本的改革につながるものになるかどうか予断は許されない。しかし、間もなく教員層の大規模な入れ替えの時期がやってくる。この時にこうした教員の資質向上策が功を奏するかどうかは、日本の命運を左右するものになると考えるのも、あながち大袈裟な思い込みとは言えないだろう。

教科再編への実践的試み



筑波大学教授 田中統治

■教科再編は行われるのか

この問いへの答えはまだ出されておらず、「棚上げ」の状態である。一九九六年に第一五期中教審が答申した『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』（第一次答申）によれば、「将来における教育課程のためには、教科の再編・統合を含めた将来の教科等の構成の在り方について、早急に検討に着手することが必要であり、このため、教育課程審議会にそれらの在り方を継続的に調査審議する常設の委員会を設け、その審議の成果を施策に反映する」（二三頁）とある。

二〇〇一年に中教審初等中等教育分科会の中に「教育課程部会」が常設され、さらに二〇〇四年には学習指導要領の総則に関する審議を行う「教育課程企画部会」も設置された。

筆者はその専門委員を務めているが、教科再編が話題となったのは一回だけである。約八年来に及ぶ宿題を果すには困難が伴うことがわかる。

教科再編は既存の教科枠を変える試みであるので、各教科の諸団体を中心に反対が強い。これは日本に限らず諸外国においても同様であり、教科再編は教育界の難題の一つである。生活科や地歴・公民科の新設、総合的な学習の時間の創設は、この難題への挑戦であった。

■研究開発学校での教科再編

旧文部省は一九七六年に「研究開発学校制度」を設けた。研究開発学校は教育課程の改善に資する実証的資料を得ることを目的とし、学習指導要領によらない実践的な試みを三年間の期限で行ってきた。教科再編への実践的研究はこの研究開発学校でのみ容認されている。つまり、教科再編の可能性は、文科省が指定した研究開発学校のデータをもとに探られる。

そこで一九八九年以降になされた主な教科再編をみると、まず小学校では、兵教大附小での「記号科」（算数と国語を低学年で統合）、滋賀県栗東町立治田東小の「生活体験科」、千代田区立錦華小の「環境・表現・生活・人間」科、福島大学附小の「人間・地球・表現」科、北九州市立祝町小「生活創造科」などによる、総合的な学習の基礎づけがなされた。

また、中学校では、滋賀大附中の「びわ湖学習」、香川大附属高松中の「人間科」、宇都宮大附中の「学び方」、千葉県館山二中の「生き方」、福教大附属福岡中の「生き方学習」他、宮教大附中の「芸術・生活文化・スポーツ」科、鳴教大附中の「未来総合科」などにより、選択教科と総合的学習について試行実験が行われた。なお、これらの概要の一部は、次の研究開発学校のホームページ上で見ることができる

ので、参照願いたい。

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenkyu/index.htm)

■品川区での「系の学習」による教科再編の事例

次に、品川区立伊藤小学校、上神明小学校、および富士見台中学校の三校が文部科学省の研究開発学校の指定（平成十三・十五年度）を受けて試みた、「系の学習」による教科再編について、その概要を述べてい。

「系の学習」は、児童生徒の「知的・実践的なスキル」を育成するため、小中教育課程の領域と教科科目を五つの系―言語系、自然系、社会教養系、健康系、および芸術系―に再編する試みである。その目的は、用具教科、内容教科、および技能教科の順に発展してきた教科枠を、より一般的な領域（言語、自然、社会、技術、体育、および芸術）に戻し、これをスキル学習に組みやすい五つの系統に再編成することである。

ただし、「系」は従来の教科枠を弾力化するための操作的なカテゴリーであって、今後、修正の余地を残している。その構想図とスキルの内容は、次頁の表と図に示すとおりである。

■研究の成果と課題

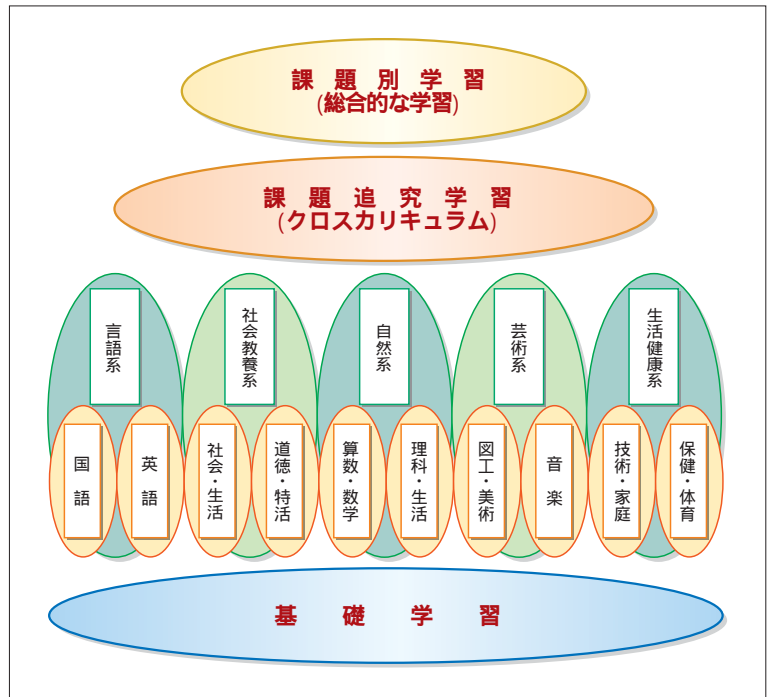
三年間の実践を通して明らかとなった成果と課題は、つぎの点である。

すなわち、第一に、「系の学習」は、教科横断型のカリキュラムを開発するための全体的な視点となりうる。トピック学習などによる相関カリキュラム論は提案されているが、教科の再編まで踏み込む理論は見当たらない。教科と総合を知的な領域として統合するため、スキルを中心とした単元構成を提案す

ることができた。だが、到達目標を明確にした小中一貫カリキュラムまで開発できなかったため、継続して研究を進めている。

第二に、脳科学の成果をカリキュラム開発に応用する可能性が示された。近年の脳科学の発展によってその研究成果はカリキュラムの構成原理としても注目される。「系の学習」はガードナー（Gardner）の多重知能論（Multi Intelligence：MI）などを参考にしており、この点で新しいカリキュラム論を提起している。中学生一八二人の自己評価をクラスター分析で調べた結果、とくに言語系が独立した能力成分であることが明らかとなった。

第三は、小中一貫による学校づくりへの示唆である。初等・中等教育の「段差」をどう乗り越えるか



図「系の学習」の構想図

系	理論スキル	実践スキル	具体的なスキルの内容
言語	コミュニケーションスキル	対話スキル	- やりとり - 発表 - 話し合い - 読む
自然	観察・推測スキル	見通すスキル	- 詳しく見る - 考えを整理する - 事実を確かめる - 順序立てて考える
社会教養	批判的思考スキル	多面的に見るスキル（人間関係技能を基盤とした）	- 問題の発見 - 判断 - 意思決定 - 分析
健康	健康行動スキル	ベターライフスキル	- セルフチェック - バランスライフ
芸術	感性を磨くスキル	非言語で感じるスキル	- 感じる（感覚の気付き） - 感じて表す（感性と表現のつながり） - 生活 環境に生かす

表「系の学習」におけるスキルの構成

という問題は、カリキュラムの接続（アーティキュレーション）として議論されてきた。小中で一貫させた「系の学習」では、従来のカリキュラムの連携ではなく、学習指導カルテの「申し送り」システムによってこれを達成しようとしている。この試みは小中一貫の教科再編による学校づくりの挑戦としてユニークである。ただし、教科担任制をとる中学校で教科再編の実践が難しいことが課題である。

このように、教科再編の試みは、単元開発や指導計画の策定までは行える。しかし、教科の目的論や方法論を提案するまでには至らない。その原因は、これが研究者でも答えづらい難題であること以上に、「走行しながらオーバードールをする」ような実践研究の難しさがある。すなわち、児童生徒の学習権に

配慮すれば、通常の教科指導を全く行わない実験はできないのである。したがって、教科再編のための実践的な検証は、本来、困難であると言ってよい。

■教科構成・教科教育をどう検討すればよいか

そこで考えられる代替案は、諸外国で行われた教科再編の実績に注目することである。「21世紀型学力」の形成をめざして取り組まれたカリキュラム改革をみれば、各教科を横断して身に付けるべき「学習能力」を到達目標に掲げるものが多い。たとえば、新しいタイプのリテラシーやスキルなどを小中高で段階化し、教科横断的に指導する試みである。これは、各教科の個別目標よりも全体目標を重視する点で、実質的に教科再編への実践である。したがって、先行例を参考にすれば、教科を到達目標の側面から再編する道が切り開ける。

国内では、総合的な学習の実践から、成功例と失敗例を分析し、その結果をもとに教科再編の可能性を探ることが考えられてよい。総合的な学習は、教科再編への「応急的な布石」とみなされ、存廃問題まで議論されている。しかし、もともと教育の現代的な課題に対応するために導入された。とくに、教科横断型の学習活動は、従来の教科（書）指導を見直すきっかけになっている。総合と教科の関連づけは教科再編への近道でもある。総合的学習の「カリキュラム評価」が必要な段階に差掛っている。

最後に、ITの活用が教科再編にもたらすインパクトを指摘したい。グーテンベルクの印刷術の発明にも匹敵するこの技術革命は、教科教育を大きく変えつつある。日本の学校はやや立ち遅れているが、今後、IT化が進めば、これが教科再編の鍵を握るように思われる。今、デジタル情報が印刷情報に取って代わる時代の大転換を迎えているからである。



有田和正の おもしろ授業発見！⑥

「ビール一杯 30 万円」って何？

— 交通事故に立ち向かう S さんに目をむけさせる柳沼孝一先生の授業 —

教材・授業開発研究所代表 有田和正

1. 「ビール一杯 30 万」に驚く

にこやかに挨拶した後、柳沼孝一先生（福島大学教育学部附属小学校）は、突然「ビール一杯 30 万」という看板のようなものを提示した。

わたしは、「ドキッ!」とした。

「一杯 30 万円もするビールが本当にあるのだろうか?」と思い、「いや、何か教師のたくらみがあるな?」と考え直した。

子どもたち（4 年生）は、

- ・ そんなビールあるはずがない!
- ・ いや、量が多ければあるかもしれないよ。
- ・ 何かありそうな気がするな!
- ・ ばかばかしい気がするけど、飲む人がいるかもしれないよ。こんなやりとりをしているうちに、ある子が、「見たことがあるような気がする!」といい出した。

「ビール見たの?」と問うと、「いや、看板だったような気がする」という。すると、もう一人の子が、「わたしも見たことがある」といい出した。

他の子どもが、「どこで?」と問いかける。

二人は前に出て、相談しながら黒板に地図を書き始めた。みんな、シーンとして地図を見守っている。

わたしもようやく、「交通事故防止の看板じゃないか?」と考え始めた。

「ビール一杯 30 万」とは、引き付けて離さない迫力がある。



2. 「ビール一杯 30 万」の看板を見に行く

二人の子どもが見たといって地図を書いた。その場所に行ってみようということになる。

場所は、福島市の岩谷下交差点（国道 4 号線と 115 号線が交わる交差点で、1 日の交通量約 5 万台）であった。ここに見学に行く。

この交差点は、交通教育専門員の S さんが立っているが、子どもたちは出会えなかったという。

H 君は「S さんが朝の 7 時 15 分から 8 時 15 分の間しか交差点に立っていないのはひどい。だから去年は 5 件もの交通事故が起きているんだ」という感想をノートに書いた。

柳沼先生は、この H 君のノートから本時を展開しようと考えた。

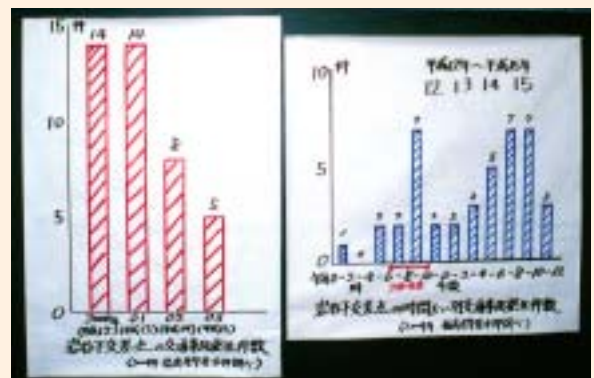
3. 岩谷下交差点の事故は減っているか?

教師は、「H 君にノートを読んでもらいます。よく聞いて意見をいってください」といって、授業を始める。

案の定、多くの子どもたちから反論が出される。このことをちゃんと読んで、この授業を仕組んでいるところがすごい。

- ・ ボランティアでやってるんだから、ひどいというのはおかしい。しかたないのじゃないか。
- ・ S さんは、タイヤの店をやっているから、ずーっとできるわけがないじゃないか。
- ・ 1 日中、交通整理ができる人なんて、いないのじゃないの?

等々、H 君に対していろいろな意見が出た。子どもたちはよく



考えてるな、と感心した。

こういう意見にもかかわらず、H君は、平成15年に5件もの交通事故が起こっていることにこだわっていた。そして、Sさんの交通整理活動の時間帯が気になってしかたがないようであった。

これをみた教師は、「岩谷下交差点の時間別交通事故発生件数」のグラフ(p.9・右のグラフ)を提示した。

子どもたちは、平成15年の5件だけは知っていた。グラフを見た瞬間、「へえー!」と驚きの声が出た。

事故が多いのは、朝の8～10時、午後の4時～10時であることが、一目でわかる。午前2時～4時は0件である。

「Sさんが交差点に立っている時間にも、事故が起きているかもしれない。しかし、このグラフではわからない」という。

教師は、「Sさんは、7時15分～8時15分まで立っている」と情報を伝え、グラフの中に赤で書き込む(p.9・右のグラフ)。

子どもたちは、「Sさんが立っている時間に交通事故があるのか?」とつっこむ。なかなか鋭い子どもたちだ。

そこで、教師は、平成12年～15年の「岩谷下交差点の事故発生件数グラフ」(p.9・左のグラフ)を提示する。

子どもたちは「平成14年から急にへっている。それはどうしてか?」という。

平成12年は14件、13年は14件、14年は8件、15年は5件、ということをもう一度よむ。

「合計41件だ」と、合計をみる子もいる。なかなか面白い子どもたちだ。

交通事故発生件数を見て、「信号機が、平成14年に変わったんじゃないか」という。

「14年から急激にへったのは、『思いやり信号機』(こんなのがあるらしい)ができたんだと思う」という子もいる。

「まぐれかもしれない」。つまり、偶然かもしれないというのである。面白い見方だ。

「8件から5件までへったんだから、まぐれではないのではないか」「でも、証拠がないから『思いやり信号機』とはいえない。偶然ということも考えられる」。

とにかく、ああではないか、こうではないかと、グラフを見ながら考える。しかも話し合いを楽しんでいるようだ。



教師が、「『思いやり信号機』に変わったのはいつか知ってるか?」と問う。この交差点を毎日通っている子どももわからないという。

これはむずかしい問いだ。教師もわからないと思って、軽く問い、「『思いやり信号機』に変わったのは、平成14年1月である」と伝えた。

そして、「思いやり信号機」なるものを提示した。

「やはり『思いやり信号機』の方が見やすい。だから、事故の件数がへったのだ!」という。「ということは、信号機の方がSさんよりもえらいんだね」と教師がゆさぶりをかける。

「ちがうと思うなあ」という子ども。

「信号機の方がえらいと思う人 12人」

「Sさんの方がえらいと思う人 12人」

と教師が確認していると、一人の女の子が「わたしは、両方えらいと思います」という。

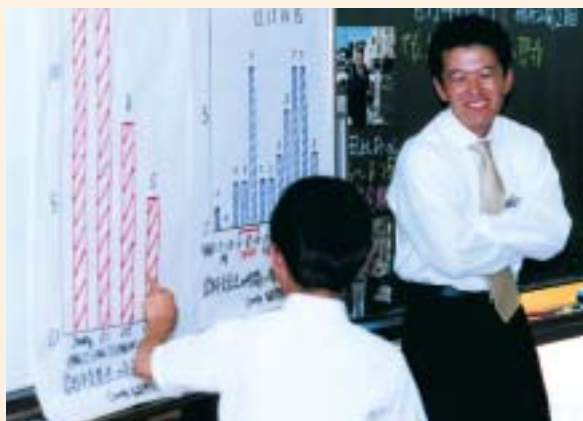
4. Sさんが24時間立っているのと同じだ!

このあと「ビール一杯30万円」の看板は、Sさんが一緒に働いていたYさんの事故死を悔やみ、二度と交通事故を起こさないようにとの願いがこめられていることを学んでいった。

これには、新聞記事が資料として使われた。

このSさんの働きかけで「思いやり信号機」も設置されたことがわかり、子どもたちは「信号機がえらいんじゃない、Sさんがえらいんだ」と考えるようになった。

「Sさんは、1時間しか立っていないけれど、信号機や看板にはSさんの思いが込められているので、24時間立っているのと同じだ」と考えるようになった。みごとな変容だ。





宿泊体験のすすめ

自然などへの豊かな感性と友情をはぐくむために

独立行政法人 国立妙高少年自然の家 所長

宮川 八岐



学校教育の充実に資する教育施設として、全国十四の国立少年自然の家がある。国立妙高少年自然の家（写真⑤）は、その十四番目の施設として平成三年に開設された。現在、年間の利用者数は約十二万人、その約七割が小・中学生で占められている。集団宿泊活動を通して、自然体験や友情を深める活動、総合的な学習への取り組みなど、様々な活動の場として利用されている。

1 豊かな自然の中で

我が国の四季は、人の心を豊かにします。その美しさ・偉大さ・厳しさが豊かな感性を育てます。それは、「人間らしく生きる心や態度」の基盤になるもので、学校教育の充実に欠かせない学習です。動植物との触れ合いや豊かな自然の中で「命の体験学習」をします。

しかし、今の子どもたちの生活から、そうした学習機会が消えつつあります。科学技術や情報化の進展は、様々な学習の可能性を提示しますが、自然、人とのかわり、勤労などの直接体験を奪うという側面も持っています。したがって、学校教育において意図的にそうした機会を設定しなければなりません。小・中・高等学校の現行の学習指導要領において積極的な体験活動を求めている理由はそこにあります。

2 仲間意識をはぐくむ —— 妙高アドベンチャープログラム

自然の家での集団宿泊活動は、人間関係を豊か

にする絶好の機会です。ぜひとも三泊、五泊といった形で実施したいものです。共同生活や集団活動を通して友情を深めます。また、妙高少年自然の家には、仲間意識をはぐくむ「妙高アドベンチャープログラム」があります。協力しなければ達成できない体験活動です。他者への信頼感を抱き協力の大切さなどを体験的に学びます。

自然体験や各種の集団活動、集団宿泊を通して子どもたちは「自己発見」、「友達発見」をし、「協力・創造」への実践的な態度を学びます。こうした体験活動の経験が、子ども一人一人の社会的自立を促し、集団生活への「適応力」をも高めるとともに、人間関係を身に付け、結果的に学校生活や学習への積極的な取組を促すという教育的価値をもつことも分かっています。

3 生活力や社会性をはぐくむ

長期の集団宿泊体験を通して、子どもたちは生活力や社会性を身に付け、一段とたくましくなります。長期宿泊に反対していた保護者も、変容す

る子どもを見て、実施後には大賛成派に変わります。

自分のことは自分でやり、進んで他のためにも行動するようになり、常に、他者との関係を考えるなど、社会性も確実に向上します。体験活動や生活の仕方を話し合って調整し、折り合いを付けながら活動する過程で身に付けていくわけです。テレビのない生活、親任せの生活からの自立を通して、自らの生活を振り返り、社会や親への感謝の念をもつのです。



● 森の散策

4 達成感、充実感を味わって

・登山・ハイキング・スキーなどで

自然体験の一つに、登山や自然林の中のハイキングがあります。厳しい登山にチャレンジし達成感を得ることは自分に自信をもつきっかけになります。ハイキングは自然観察や環境学習の有効な場になります。冬はスキー活動で白銀の世界を満喫します。大変な思いをし、協力しながら困難を乗り越えた後の、夜の集いは友情を深め合う機会にもなります。キャンプファイヤーや部屋での語りなどから得られる充実感が集団宿泊体験活動の大きな魅力になります。

・妙高企画「オープン・ザ・ドア」

国立妙高少年自然の家の主催事業の一つに「オープン・ザ・ドア」(太平洋から日本海へ)があります。これは、不登校などに悩みをもつ子どもたちが集まり、冒険の旅をする中で自らに自信を得、協調性を身に付けるなど心身をたくましくするスケールの大きい長期移動型体験活動です。本年度は四回目で、六百五十キロをマウンテンバイクで走破しました。途中、富士登山やロッ



● ありの巣遊び



● 登山



● スキー



● 夜の集い

ククライミングなど各種のチャレンジ活動が用意され、それをやり抜き、強烈な達成感と充実感を味わおうという取組でした。自然の家での宿泊活動も当然組み込まれています。

・多様な集団活動の経験

宿泊を伴う豊かな体験活動は、基本的には集団活動を通して、企画、協働、問題解決、創意工夫、リーダーシップ、ボランティア活動、役割貢献体験など、様々な学びをします。それは、学校行事の遠足・集団宿泊的行事のダイナミックな実践の場になります。各種のグループ活動では、ほとんどの子どもに「場面リーダー経験」を与える機会にもなり、学校の計画によっては集団活動の成果を確かで大きなものにする事ができます。自然の家は、その企画などに様々な面で支援しています。

5 多様な可能性を求めて

各学校や各種団体がより多様な可能性を求めて活動計画の改善に取り組み、体験活動の教育的意義を一層大きくすることが期待されます。

・体験活動を組み合わせる

例えば、修学旅行と自然体験や農業体験・職場体験などを組み合わせることが考えられます。そのことは、学校行事の関連・統合の工夫にもなります。しかし、宿泊日数を十分確保し、真に豊かな体験の機会にしたいものです。

・「総合」などを組み入れる

集団宿泊活動に総合的な学習の時間や教科によつてはその地域ならではの学習などを組み入れるという工夫です。総合的な学習の集中取りによつて確かな体験学習の機会を創出できます。それによつて、一学期の総合的な学習の一週間の配当にゆとりを生み出すこともできるのです。

宿泊を伴う体験活動を年度初めに実施し、学校生活オリエンテーションを充実したり、夏季休業中に実施すれば日数的にも指導体制にも十分配慮をすることも可能になります。そうした工夫をする学校が増えつつあります。

・学校間交流なども

環境の異なる地域の学校が合宿を共にし、学習や集団活動の豊かな広がりを目指している学校もあります。いわゆる学校間交流です。子どもたちにとつては刺激的であり、様々な体験や学びの可能性が広がります。妙高少年自然の家でも複数校が合同合宿をしていますし、通学合宿も行っています。そうした学校には、いじめ等の問題行動は見られないのです。

*

全国十四か所の少年自然の家が、これまで以上に積極的に活用されることを期待いたします。

国立妙高少年自然の家

〒949-1223

新潟県中頸城郡妙高村大字関山63231-2

TEL 0255(82)4321

FAX 0255(82)4325

北から 南から

■ 茨城県 ■

ぼくたち、わたしたち なみき環境調査隊 ～行動は足もとから、思いは地球規模まで～

つくば市立並木小学校校長
久松 隆

数年前から、本校では環境教育に力を入れている。「なみき環境調査隊」という名のもとに、主に総合的な学習の時間を活用して、それぞれの学年において児童の実態に応じたねらいと学習テーマを設定し、情報機器を活用して様々な人々（他校児童、地域住民、専門家）とかかわり合いながら、身近な環境の問題や改善について考え取り組んでいる。

第4学年では、理科の「季節と生きもの」の学習から、身の回りの自然に生息する動植物に目を向け、日本の四季と動植物の関係や生態について調べて、「動植物が住みやすい環境とは何か、自分たちができることはどんなことか」について考え実践している。

第5学年では、つくば市全体に目を向け、「住みよい街づくりをめざして」を学習テーマに、自然保護や公害、福祉、エネルギーなどの様々な環境問題について取り組んでいる。

そして、第6学年では「卒業大研究」として、第4、5学年での環境学習で取り組んだ内容をまとめ、成果と課題を在校生に引き継ぐ準備を行っている。その内容は「霞ヶ浦水質浄化の研究」や「本校周辺の環境調査及び環境改善」「花室川の水質調査を共通の目的とした他校との共同学習」、その他にも「エコクッキング」や「ケナフの研究」「生きもの調べ」などがある。

また、本校のホームページを活用して環境に関する情報を発信し、他校の児童や地域社会との交流・共同学習を行い学習内容を深めている。

このように、本校では「行動は足もとから、思いは地球規模まで」を合い言葉に、今までの取り組みを代々に受け継ぎ「環境を守るために自分ができることは何か」を自分自身に問いかけ、現在も環境学習に取り組んでいる。



■ 青森県 ■

教科指導と情報教育の統合を目指した コンピュータの効果的活用

八戸市立小中野小学校校長
西館郁一

本校は、全校児童605名、平成17年度には創立130周年を迎える歴史と伝統に彩られた学校である。全校をあげて取り組んでいる書道では、白扇書道会主催の書道展他で約20年余りにわたって全国優勝を続けるなど、自国文化を理解し、尊重する態度の育成に努めてきた。

その一方で時代を先取りした形で情報教育にも積極的に取り組み、次のような歴史を刻んできている。

- ・平成7年から3年間、八戸市教育委員会から「コンピュータの効果的な教育利用」について研究委託。
- ・平成13年、上月情報教育財団主催「上月情報教育賞優秀賞」を受賞。コンピュータ室を2教室に増設。
- ・平成13年から3年間、文部科学省の「次世代ITを活用した未来型教育方法研究開発事業」実施校。

研究開始当初から、本校の情報教育の基本理念は、「教科指導と情報教育の統合」を目指して実践してきた。コンピュータを使うことに目標をおくのではなく、コンピュータはあくまでも情報収集や学習したことの表現・伝達のための手段であり、課題追究や解決のための知的道具であるという考え方である。そして、どの学級でもコンピュータを活用した授業実践を可能とするティームティーチング体制の確立と授業実践事例の累積に努めながら現在まで実践を続けてきた。

情報教育を取り巻く環境も年々変化し、八戸市では情報教育アドバイザーの活用や市内の学校をネットワークでつなぐ図書館運営など、教育の情報化の動きが加速してきている。今振り返れば研究開始当初と比べると隔世の感があるが、情報に振り回されることなく、主体的に情報を収集し、自ら考え判断し、責任ある情報発信ができる児童の育成を目指して今後も実践を積み重ねていきたい。



■ 鹿児島県 ■

アルミ缶で車椅子を

鹿児島市立武小学校校長
有留国俊

今、心の教育が求められている。本校は、県青少年赤十字研究推進校としての指定を受け、「思いやりの心を育み社会性を培う」ために、教科等の学習の中でボランティア教育を推進している。例えば、社会科教育の中では、地域ひいては国土や地球に対する理解と愛着を深めることによって、ボランティア意識につなげたいと思っている。

また、本校ではボランティア教育の一環として、JRC活動を積極的に進めている。JRC活動では、清掃活動や福祉活動などに取り組んでいるが、中でも特徴的な取り組みがアルミ缶回収で、JRC委員会が中心になり、年間を通して回収活動を行っている。

VS（ボランティアサービス）カードを発行し、アルミ缶を10個、または書き損じはがきを10枚集めるとスタンプが一つもらえる（25個のスタンプでカード1枚となる）。このVSカードが、子どもたちの励みになっている。今では家庭や地域の人々からも協力してもらえるようになり、おかげで、昨年度集めたアルミ缶は約65,000個、業者に引き取ってもらったお金で車椅子2台を購入して特別養護老人ホームや市の社会福祉協議会に贈呈した。高齢者の方々や職員に大変喜ばれ、子どもたちも本当にうれしそうであった。

しかし、苦労もある。何しろアルミ缶が膨大な量になるために、潰したり整理したりして保管する作業や、集めたアルミ缶をトラックで運ぶ作業も大変である。でも、6年生が「足の不自由なおばあさんたちに車椅子を贈った時、涙を流して喜んでいた。その姿を見て、1・2年生が小さな体に大きな袋をぶら下げて持ってきていた様子が目に浮かびました。」などと作文に書いているのを見るとうれしくなる。今後も「気づき、考え、実行する」をモットーに、継続してボランティア教育を推進していきたいと考えている。



■ 東京都 ■

美しい日本語を世田谷の学校から

世田谷区教育委員会事務局
泉谷憲俊

平成15年1月に発表された文化審議会国語部会の報告では、母語である日本語の果たす役割として「知的活動の基盤」「コミュニケーション能力の基盤」「感性・情緒等の基盤」をあげ、生涯を通じて個人の形成に関わるものであることが指摘されている。

現代社会を省みると、都市化や核家族化が進む中で、子ども同士や大人と子どもとのコミュニケーション不足が、さまざまな社会問題を生む大きな要因となっているといえる。

一方、グローバル化が進む21世紀においては、個人としては広い視野を持ち、社会にあっては相手と相互に理解し合え共感できる子ども達を育成することも求められている。

これらのことから、世田谷区教育委員会では、総ての思考の土台である母語＝日本語に着目し、「深く考える児童・生徒を育成する」「自分を表現する能力やコミュニケーション能力を育成する」「日本の文化や伝統に対する理解を深め、それらを大切にす態度を育成する」という三つのねらいのもと、平成15年度より区内95の全区立小・中学校で「美しい日本語を世田谷の学校から」という独自の取り組みを行ってきたところである。

そして、この取り組みを一步進めた教科「日本語」を創設することが、昨年12月に政府の第6次構造改革特区として認定された。

今後は、前述の三つのねらいを、それぞれ「哲学」「表現」「日本文化」という領域ととらえ、小・中の一貫したカリキュラムを編成していきたいと考えている。

言葉は文化を支える。豊かな精神文化を育んでいくためにも、母語である日本語を意識して学び・使う時代になっていると思う。



朝日新聞教育取材班『教師力』（朝日新聞社）

苦悩する教師たちの姿浮き彫りに

評者 渡辺皓介（元岩手県中学校校長）



この本の構成は、第1部「教師力」、第2部「教育産業」、第3部「変わる入試」、第4部「国家と教育」となっている。

学校教育についての現下の状況と、その問題点のほとんどが取り上げられている、といってよいであろう。

この中で最も注目されたのは、書名にもなっている第1部の「教師力」で、多くの学校で困惑と焦燥の中で苦闘している教師たちの姿が紹介されている。

「教員をやめたいと考えたことがあるか」というアンケートに、「ある」が50%を超えていることに驚かされるが、その原因をまとめてみると、おおむね次のようになるようだ。

さまざなりした子どもたちとの対応、評価評定導入への不安、無理解で自分勝手な親たちとの応接、教師間の対立、相互不信など。

だが、休日もろくに休めないほどの多忙さも、多くの教師があげている。思うに、この十年ほどの間に、中教

審が打ち出した提案や、文部科学省の指導要領の改訂事項は「ゆとりと生きる力」「指導内容の一部削除」「まなびのすすめ」「総合的な学習の導入」「指導事項の一部追加」など、矢つぎばやなものであった。

教育現場では、一つの新しい課題について、その趣旨を理解して計画化し、スムーズに実践できるためには、少なくとも三、四年を要するのである。

「時間が足りない」は、多くの教師の声である。ひとりひとりに評言を書いてやるために、ノートや作品を家に持ち帰る教師がいかに多いことが。

こうした中で、仕事にやり甲斐を感じている教師も多く、大阪大森教授の調査では、80%以上がそう答えたところ。すべての教師がそうであってほしいと思うのは子を持つ親の願いであろう。

巻末資料の朝日新聞・ベネッセ未来教育センターの共同調査は、じつにさまざまなことを考えさせてくれる貴重なアンケートである。

ジョン・A・シンドラー著「1111」と「身体」の法則（PHP研究所） 伊藤真訳／河野友信監修

1111が身体におよぼす影響を解明

評者 衛藤 隆（東京大学大学院教育学研究科教授）



今日、忙しい毎日を送る人々が、ここに加わる様々なブレッシャー（ストレッサーという）に耐えきれず身体への影響がでちであることはよく知られ、心身症ということばも定着してきている。心療内科はこれらの患者の方々にぎわっていると聞く。ここからだには互いに影響し合う関係があり、脳を舞台にその関係を追求める研究が進められている。

本書はほぼ半世紀前に米国ウィスコンシン州の医師、ジョン・A・シンドラーにより書かれた本であり、原題は「How to live 365 days a year」（1年の365日をいかに生きるか）である。当時100万部を超えるベストセラーとなり、その後13カ国で翻訳出版された。全15章から成り、前半の6章が第一部を構成し、「身体の病気の50%はここから起因する」という主題でまとめられ、後半の9章は「心因性のからだの病気を防ぐには」が主題になっている。半世紀前の書物ながら、現代人の生活にも起こりうる様々な問題につきわ

かりやすい実例をあげながら解説が加えられており、古さをあまり感じずに読むことができる。疾病の概念の変遷があったことや、免疫についての記述が乏しいことなどは少し前の時代の記述であることを感じさせるが、監修者・訳者の適切な補則解説が付されており、現代の書物として十分に通用する。

当初「何故、このような古い本を日本語に訳したのだろう」という疑問もつたが、読むうちに氷解した。監修者も冒頭で述べているように、シンドラー博士は「もっとも多くの人が未成熟さを残しているのが、セックスです」と述べているが、これは今の日本の状況に見事に当てはまっている。人間のここからだをめぐめる様々な問題は本質的なところでは50年の年月を経て、大した変化はないということを示しているようにも思える。その意味で、本書をじっくりと読んでみると、かなりの人にとっては大変参考になるのではないかと思う。

Column

現代の家族と

次世代を育む力

その2

渡辺秀樹（慶應義塾大学教授）



3 養育責任の母親独占の意味

前回は、現代家族において養育担当者が少ない、つまり多くは母親のみという状況が危機に弱いと述べました。経済における独占禁止法をお考えいただければよいと思います。この法律の意味は、危機対応と経済社会の発展、さらには消費者の主体性の確保にあるはず。

母親独占状態は、第一に、危機に弱いという点と、第二に、子どもの養育環境をよりよくする仕組みとしても弱い。やはり複数のひととびとが関わるなかで、それぞれが、子どもへの関わり方を学習していくものだと思います。第三に、けっきょく、子どもは、乳幼児期には家族において衣食住や愛情などの基本的なニーズを充足するわけですが、それが常に母親のみということになりますと、子どもの母親への依存が絶対のものとなり、子どもの自律性や主体性を育む構造としては心配になります（独占下においては消費者の主体性は確保しがたいのです）。複雑な構造においてこそ、子どもが、価値観の多様さを知り、人間関係の機微を知り、それらを調整し選択するなど人間関係を形成する力を育んでゆくものだと思います。

複雑な構造が人々の自律性や主体性を育むというのは、社会学の基本命題でもあります。単純な養育構造は同調性を育むとしても、自律性を育む土壌としては弱い、ということとは

いえるでしょう。

社会は「丁社会」あるいはグローバルゼーションと呼ばれて変動が激しく、また複雑化していきます。この社会で求められるのは、同調性ではなく、変化や複雑さに対応して適切な意思決定をする自律的・主体的人間だということです。そのために複雑さを養育環境に組み込むことが求められているのではないのでしょうか。

4 次世代を育む力の危機

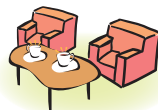
児童虐待や、引きこもり、少年事件など、次世代を育む力の危機というべき問題が多く報道されています。個々のケースは多様な要因の複合によって起こっているに違いありませんが、次のように考えることも出来ると思うのです。

第一に、社会はいっそう複雑化している一方で、人々が育つ家族はいっそう単純化しているということ。前者を社会システム、後者を社会化システムと呼ぶことができますが、この両者の乖離があまりに大きいということです。母子カプセルが仮に温室のように暖かであっても、いつかは複雑な社会に出ていかなければなりません。その準備が構造的に用意されていないとき、引きこもり、あるいは人間関係形成不全といえるような事態につながるということがあるのではないのでしょうか。

読者のページ

Educo Salon

（エデュコサロン）



●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

教育出版 Educo編集部

FAX: 03-3238-6975

e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●C.W.ニコル氏の「森と川の国連ができる日を夢見て」を拝読し、感動を覚えました。多少、自然教育に係わる者として（愛知県キャンプ協会の会長を務めています）「目から鱗が落ちる」思いです。日本人自身が知らなかった（気がつかなかった）日本の自然のすばらしさ、そして、それを守る重大さを改めて教えられました。自然保護により、経済がよくなり、健康にもなる。さらに、平和になる。自然を復活させ、自然を保護し、次世代を担う子どもたちに、自然のすばらしさと大切さを学ばせる機会を与えることに、少しでも寄与できたらと考えています。

（愛知県 山本 徹）

●斎藤次郎さんの文章はいいですね。昨年、今年と、残念ながら長崎県（長崎市と佐世保市）で二つの悲しいことが起こりました。今でも、どちらもテレビで、あるいは新聞紙上で、いろいろな取り扱われています。一億円もらっても、「記憶にございません」ですとぼけて、それで起訴もされずに、75日もたてば、誰も口に

すらしない。この大人の世界がある限り、子どもたちを責めても、いろいろと分析したり法改正をしても、明るい展望はありませんね。全体に流れる斎藤さんの主張に賛成です。

（長崎県 江口定男）

●「森と川の国連ができる日を夢見て」では、ニコルさんが感じた日本のよさや問題点、そして長野での森の再生活動の話などに感動しました。また、「学習指導要領と発展的な学習」は、教育の今日的な課題に答えた内容です。いまいち具体的な例が加わればと思いました。「りんごを育て、生徒をはぐくむ」実践や、「宇宙メダカ・ランド『めざせ、一万匹！』」「八街市の幼小中高の連携教育」の実践には、頭が下がる思いです。ただ、Educo Salonは、あまりに活字が小さく残念です。（静岡県 加藤延好）

●現職時代を思い出しながら、いつも懐かしく『Educo』を読ませてもらっております。本誌は、教育を多方面から幅広く追究しており、教

育の重要性を広い視野から再認識させてくれます。今回の秋号は、特に収穫の季節にふさわしく、「おもしろ授業発見」や「りんごを育て、生徒をはぐくむ」などの充実したユニークな実践が紹介されており、深い感銘を受けました。

（北海道 守谷弘弘）

●私（82歳）は、今秋、5年生の総合的な学習の授業「間伐材がよみがえる」を公開しました。この授業のねらいは、まず、間伐材の効用を理解させ、多くが放置されたままの間伐材の一部を製材工場に運び、木材としてよみがえらせていることを、製品の家具・器具・工芸品などの展示することによって実感させます。また、花台の素材として活用されている木片を各自に提供して磨かせ、間伐材の木材としての個性ある美しさに開眼させます。そして、授業は一転、間伐材を原料とした牛の飼料のサンプルを各自に渡し、五感をもって間伐材からの創造に感慨を持たせ、授業を閉じます。C.W.ニコルさんのご高見に応えて。 （静岡県 佐野藤雄）



わたしの「地球となかよし」メッセージ
2004

入賞作品発表

大賞



カラスと半分こ

ぼくたちは、総合の勉強でスイカを植えました。だんだんとスイカも成長しました。次の日にスイカを食べようと思っていたのですが、その日の朝見てみると、すいかはカラスにつつかれて食べられていました。残念でした。

ぼくたちは、おいしいすいかを食べられなかったけれど、カラスはおいしいスイカをお腹いっぱい食べたことでしょう。

ぼくたち人間は、鳥や生き物や植物をいっぱい食べて生きています。ぼくもスイカもカラスもこの地球に生きています。生き物は生きていくために、食べ物を探していくのです。

来年実ったスイカは、「半分こ」にしようよ、カラスさん。

坂根大樹（山口県・小学校6年）

【評】...カラスも全部食べたら申し分けないと、残してくれたようですね。この穴の向こうに、新しい関係が見えてきます。

人類永遠の課題に向かって

「地球上のあらゆる命と自然環境を大切に！」をテーマにした「わたしの「地球となかよし」メッセージ」は、本年度で2回目を迎えましたが、海外日本人学校からの応募も含めて、全国から642点の作品が寄せられました。ご協力いただいた子どもたちや先生方に、心より感謝申し上げます。

昨年10月14日と10月23日の2回にわたって審査委員会を開催し、入賞作品の選考を行いました。その結果、大賞には坂根大樹さん（山口県・小学校6年）が選ばれました。

また、特選には、高橋 陸さん（広島県・小学校1年）、安永 絢さん（山口県・小学校3年）、加藤杏実さん（アメリカ・小学校3年）、角田奈美さん（埼玉県・小学校3年）、和田崇泰さん（広島県・小学校4年）、齋藤絢子さん・中野真理さん（千葉県・中学校1年）、米満愛弓さん（大阪・インターナショナル8年）の7作品が、そして入選として17作品が選ばれました。

応募いただいた作品は、いずれも人や動植物へのやさしさや自然を大切にしようという意欲が、子どもらしい感性で表現されていて、たいへん心強く感じました。しかし、地球上ではいまだに戦争が絶えませんし、また、この冬の異常な暖かさは大気汚染による地球の温暖化が進んでいることを予感させます。今後とも、この人類永遠の課題に向かって、子どもたちとともに半歩でも一歩でも進んでいきたいと考えています。

（わたしの「地球となかよし」メッセージ事務局）

【審査委員】（敬称略）

有田 和正

教材・授業開発研究所代表
生活科・社会科教育

角屋 重樹

広島大学教授
理科教育

ケビン・ショート

東京情報大学教授
里山の研究

児島 邦宏

東京学芸大学教授
総合的な学習

佐藤 郡衛

東京学芸大学教授
異文化間教育



● 審査風景



ふしぎに会った!!

わたしは、ツマグロヒョウモンというチョウを育てました。さいしょのよう虫の時は、みんな「わあ!毛虫だ。」と言っていました。よう虫は、パンジーの花や葉を食べて育っていました。

ある日、よう虫が動かなくなり、気をつけていると、給食の時、よう虫がさなぎになりはじまりました。よう虫は、おしりの方からさなぎの服になっていきました。

その服は、オレンジ色から葉っぱのような茶色にかわっていきました。そして、さなぎには、きらきらしたほう石のようなきれいな金色のつぶがついていました。わたしは、その事がとてもふしぎでした。

これからこの地きゅうでどんなふしぎに会えるか、わたしはとても楽しみです。

②

安永 絢 (山口県・小学校3年)



ぼくのたからもの

キラキラひかるかい。

きれいだったけど、くだけた。

このかいは、すなはまでみつけたかいです。

このかいがすきです。

①

高橋 陸 (広島県・小学校1年)



汚れてしまった黒瀬川

僕は、どうして黒瀬川が汚いのか不思議に思っていました。総合的な学習の時間に、調べてみました。

昔は下水道がなく、家庭排水は、川に直接流していました。洗剤などのまざった水を流すことで、水が濁り、生物も死んでしまったようです。

現在、下水道ができ、下水処理場で水をきれいにしてから川に流すシステムができました。これで、少しは川はきれいになるだろうと思います。ゴミのゴミ捨てがなくなれば、もっと川はきれいになると思います。

僕たちの町の川です。きれいな水に戻して、僕たちも楽しめる黒瀬川にしたいと思います。

⑤

和田崇泰 (広島県・小学校4年)



地きゅうとさんぽ

私のゆめは、空をさんぽすることです。気きゅうにのってみたい。5つの風せんにひっぱってもらってもいい。雲のタクシーがむかえにきてくれたら最高。

あれっ、アイスクリームがうかんていよ。お友だちもどんどんきてね。

でも、空気のきれいな、青くすきとおった空じゃなくちゃね。それには、ひとりひとりが気をつけていかなければなりません。きれいな地きゅうにしたいには。

④

角田奈美 (埼玉県・小学校3年)



地球となかよくしてみたら

地球となかよくしてみたら、庭に大きなかぼちゃがなりました。

地球となかよくしてみたら、友だちたくさんできました。

地球となかよくしてみたら、わたしは、うれしくなりました。

かんたんだからしてみたら、みんななかよくできるから。

③

加藤杏実 (アメリカ・小学校3年)

・ 特選作品【評】 ・

① ... なんと輝く貝の絵でしよう。あなたの心が光っているからです。

② ... ふしぎを見つけ出し、描き出したあなたの眼がすばらしい。

③ ... 地球は、けしてうらぎりません。私たちしだいなのですね。

④ ... 楽しい、ゆかいな、夢のようなさんぽです。「それには」を心にとめて。

⑤ ... 川に生き物がかえってきましたが、口を開けて苦しいようです。もう一步!

⑥ ... くっきりと浮かび上がった花。手の窓を通して心の窓から見た世界ですね。

⑦ ... 世界中の人々が、平和に向かって手に手をとって大行進。この絵のように!



争いのない世界

誰だって戦争は嫌だ。

戦争が好きなんなんてない。

なのにどうして世界から戦争がなくなるのだろう? なぜ同じ人間が人間を殺すのだ?

それはきっと、自分以外の人のことを理解しようとしなない人が多いからだ。自分の考えを人におしつけようとする人が多いからだ。戦争をなくすには、もっとおたがいを理解し、おたがいの考えをそん重ししなければいけない。

⑦

米満愛弓 (大阪・インターナショナル8年)



夢の窓

みなさんは手でつくる窓を通して、外の世界を見たことがありますか?

この写真のように、手でつくった窓を通して、外の自然を写すと、普段見る外の世界とは、違う世界が見えてきます。

たとえば、今見ている植物もいつか、将来は姿形がかわって見えるかもしれません。

みなさんも、一度きりしか見れない自然を大切にしてください。

⑥

齊藤絢子・中野真理 (千葉県・中学校1年)



きれいになったよ

神東小学校では、何年か前から愛鳥活動を行っています。愛鳥活動では、野鳥かんざつや鳥の世話（冬）を行っています。

この間台風が来て、鳥たちがいつもとまっている木の枝がきずついたので、みんなで心ばいしていました。でも台風がすぎて、ぼくたちが勉強していると、いろいろな鳥たちの声が聞こえてきたので、台風をうまく乗りこえたのかなあと、少し安心しました。

ほとくの学校には、毎年シジュウカラが子育てをしに巣箱にやってきました。今年は愛鳥委員会で巣箱のそうじをしました。去年してなかったで、去年の巣の上に今年は巣を作っていました。

来年もぼくたちの近くで子育てをしてほしいです。鳥たちがいつまでも楽しくらせる場所を大切にのこしていきたいと思います。

浅海慶太（山口県・小学校3年）



生きものを大切に

生活科でやさいをうえました。トマトやきゅうりやだいずや、米などをうえました。生きものは、人げんと同じように、えいようや、水をもらって大きくなることが、わたしは、生活科をべんきょうしてわかりました。それに、やさいはコンクリートでは、うるえることができないけど、土ではうるえることができました。

ちきゅうは、コンクリートだけあればいいとおもっていたけど、土もないと、人げんや生きものはそだないということがわかりました。これからも、ちきゅうを大切にしていきたいと思います。

といゆいな（広島県・小学校2年）



私の町の黒瀬川

私の町には、黒瀬川という川があります。黒瀬川は、ゴミがたくさん投げ込まれていて、気持ちのよい川ではありません。水も濁っています。

川に入ってみると、ゴミや何かのフンのようなニオイがして、少しくさかったです。こけが生えてヌルリとしている場所やゴミがたまってドロリとしている場所もあります。

汚れている水の中には、たくさんの微生物がいました。微生物が、一生懸命に水をきれいにしているのだと思います。ゴミをすみかにして、たくましく生きている生き物もいます。

決してきれいな川ではありませんが、たくさんの命が生きている「私の町の川」です。大切にしたいなあと思います。

向畑佑希乃（広島県・小学校3年）



「はいきガス」

わたしは、はいきガスがなかったらいいなと、おもいます。

じてんしゃなら、はいきガスをださなくていいけど、オートバイや、バス、くるまは、はいきガスをだして、ちきゅうをよごしていきます。

はいきガスがふえたら、ちきゅうは、あたたかくなってしまいます。そして、オゾンそうにあながあいてしまいます。

はいきガスがなかったら、ちきゅうはよろこびます。

伴野千晴（静岡県・小学校3年）



うちゅうから見た地きゅう

地きゅうの上には、うちゅうがあるのかな。うちゅうに行ってみたいなあ。そして、そこから地きゅうを見てみたい。

みどりや青がいっぱいの地きゅう。みんなが楽しそうに生きている地きゅう。空気もきれいで空も青い地きゅう。せんそうもなく仲よしの地きゅう。

そんな美しい地きゅうを、うちゅうから見てみたいなあ。

小川みゆき（埼玉県・小学校3年）



命

ぼくは、ヘビ、カエル、クモ、ハエ、トカゲ、ネズミなどを、人間はなぜいやがるのかと思います。

ヘビは、鳥などにおそわれてるし、カエルは、ヘビなどにおそわれないようにして、クモは、人のために虫をとってあげてるのに、なぜ人は殺してしまうのかと思います。

ぼくは、生き物を殺してほしくないです。生命は大切です。

石垣智宙（静岡県・小学校4年）



大切な海の生き物達

私達の渡子の海には、たくさんの生物達が、生息しています。カニや、ヒザラガイなどがいます。

私は、その生物達が、大好きです。

岸べきを観察していて、私は、変化を調査しています。

私は、これからも渡子の海も、生物も残していきたいです。

香川恵里華（広島県・小学校4年）



巣箱をきれいにしたよ！

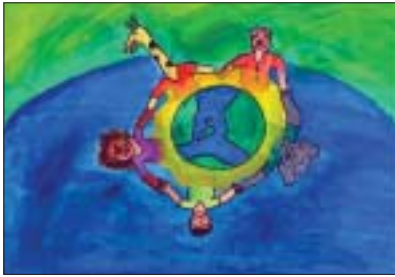
わたしは、愛鳥委員会の仲間と、学校の中にある鳥の巣箱そうじをしました。毎年シジュウカラが巣を作っているの、そうじをしてまた来年も子育てをしに来てほしいからです。

その巣は、フワフワしていて毛や綿のようなものでできていました。生まれたばかりのシジュウカラの赤ちゃんが喜ぶようにと、親鳥が一生涯に命をかけてあげたんだと思いました。

わたしは、鳥の中でシジュウカラが好きです。羽の色をよく見ると水色に見えるところや、絵の具では作れないような黄緑色にみえるところがあるからです。

わたしたちがきれいにした巣箱で、来年も子育てをしてほしいなあと思っています。

松本有香子（山口県・小学校4年）



みんなの地球

地球にゴミをすてたら、動物がこまります。木を切りたおしたら、植物がこまります。

地球には、たくさんの生き物がいるから、だれかが、かってなことをすると、他のものがこまってしまうことがあります。

少しは他の生き物の気持ちを考えてあげたらいいいと思いながら、この絵をかきました。

向井勝紀（広島県・小学校5年）



雑草は強い

ぼくは、草むしりについてのはいくをつくりました。草はむしってもむしっても生えてくる生命力がとても強い物だ。ふまれてもふまれてもおきあがってくるほんとうに強い物だ。草は、いろんなところに生えて、人間にむしられて、燃やされたりしている。

でも草の中には、人間の負ったきずをなおすことのできる草もあって、すりきずや虫さされなどの時にその草のえきみたいなのをぬるとそれがあさまるから草は大切な物だと思う。

草は、生命力がすごく強いけど、ぼくは、あまり生命力が強くないから、草をちょっとおてほんに生きていきたい。草は、地球に必要なと思うからむやみに草をむしらないでほしいです。

森本壮胤（富山県・小学校5年）



未来の地球は、このように

私の家では、金魚を飼っています。そこには、水草をいっぱいおぼせています。水草を茶色にしないように、大切にしています。

もっと、緑をふやして行って、きれいにしていきたいです。宇宙人に、「きれいな星だな。」って、言われるような地球にしたいです。

金魚だって、小さな体を、ゆうがに、ひらひら、そして、ゆらゆらと、人間をいやしてくれます。そのような、力を持っている金魚がこの地球にいるのだから、「地球もそんなふうになるといいな。」と思います。

殿岡レミナ（静岡県・小学校4年）



星空

おじいちゃんが昔は空に手が届きそうなくらい星があったと言っていた。

わたしはもっとたくさんの星が見たくなった。

空に散らばる星、今はどこにあるのかな？ もう二度と見られないのかな？

そう思うと悲しい。見たい。たくさんの星を。

森本紋奈（静岡・小学校6年）



地球の苦勞

暑い暑い、まだ夏じゃないのに、暑すぎる風もふかない日が続く

それに、つれ、車では、冷ぼうづくし

今、ぼくは、アスファルトの上、車が横をどろどろさえぎっていく

そのたびきたくない空気を吸って、むせる

下はきたくない、上は燃えてる

地球は、どうなるの？

齋藤穂高（静岡・小学校6年）



富士山が泣いている

道ばたにゴミが落ちているのをよく見かけます。ゴミをすてる人たちは、あたり前な事が出来ていない、ダメな人だと思います。私はそういう人たちのようにならないように、あたりまえのことでしょっかりできるようにしたいです。

道ばたにゴミがおちていると、自然まで汚れてしまって、人間だけのことでなくなってしまう。事実、富士山は、ゴミがたくさんあったために世界遺産になれませんでした。富士山は、人間のせい、いい迷惑だと思っているにちがいないと思います。

大木奈生（静岡・小学校5年）



将来の地球

もしも、地球がこんな姿になったら、あなたは どう思いますか？

温暖化や、オゾン層の破壊などといった公害問題によって、僕は百年後の地球の姿がこんな状態になってしまうのではないかと.....と思います。

私たちの地球がこんな状態になるのを防ぐため、これからどうすればよいかを考えないといけないと思います。

中村さとき（大阪府・インターナショナル8年）



種

水が植物を作る。植物が空気を綺麗にし、食べ物を作る。そしてそれを食べ、僕たちが生きている。僕たちはこのような大きなサイクルの中で生きている。

皆はもう忘れたかもしれないが、昔は緑が濃く、世界が自然であふれていた。皆が自然を大事にし、自然とともに暮らしていた。

だが今では、緑も少なくなり、環境汚染が進んでいる。それでも、僕たちは自然を壊し続けている。現代人はそれを当たり前だと思い、こんな環境で生きている。

僕たちが今しなければならぬことは、自然の種を植えることだ。どんなに長くかかっても、これまでに育ち、未来の僕らに希望を与えてくれる、強い種だ。

水沢 丈（大阪府・インターナショナル8年）



地球から命は生まれた

地球は命の源だ。その地球があるから私達は生まれてきた。大きな命、小さな命。地球は様々な命を生み出してくれる。

そこに生えている小さな芽。朝露を輝かせ、いきいきと生きている。これも地球から生まれた。

人も動物も鳥も虫も植物も、そして空気も水も。地球がくれた命だ。

だから、私達は、地球を汚してはいけない。なぜなら、地球は、偉大な母なのであるから。

いつまでもこのあたたかい自然が永遠に続きますように.....

荒山美紀（茨城県・中学校1年）



創作活動は小山君と二人で始めた タケカワ ユキヒデさん(作曲家・作家)

◎タケカワさんには、小・中・高・大学と同じ学校に通った友人がいた。その名は小山條二君、青春の同伴者だった。

実は小学校では同じクラスになったことは一度もなく、中学二年の時に初めて彼と一緒にクラスになりました。席も隣りになって、ある時授業中に彼のノートのをのぞいたら、ページの端っこに番号をふって、その数字の回りにデザインをしているんですよ。パラパラめくると数字を囲った丸がだんだん小さくなっていく。思わずそのノートを取ってあげて「オレにもやらせる」って言って、それからえらくながよくつたんですよ。

それから、二人で新聞委員になり、『古新聞』という名前の壁新聞を作っていました。ある時、彼が新聞に載せる推理小説を書くこと言い出した。書きあげたものを見せ合ったら、僕のは最初に人が死んで、その謎を解き明かすという内容だったんだけど、彼のは最初に死体が出てきて、その後も次々と殺人事件が起きるダイナミックな展開なんですよ。彼は文章もつまいし、何でもオシャレにやるやつでした。

◎その後、そろって浦和高校に入学、放送部 ラグビー部と行動を共にする。

放送部では、昼休みにビートルズをかけて、ギャグの応酬のような原稿を書いて流していました。ある時、友達に「今日の放送よかったらどう？」って聞いたたら、「えっ、そんなのやってるの？」って言われたんですよ。音が小さかったのかと思って、ボリュームを倍にしたら、いきなり三年生が飛び込んできて、「昼休みも勉強しているんだ！」ってどなられた。それで放送部をクビになってしまいました。ちょうどその頃、ラグビー部でメンバーが足



ゴダイゴ時代「ガンダーラ」が大ヒット。以降、音楽活動の他に執筆、講演やテレビ・ラジオなどで幅広く活躍。

りないという話があつて、ポジションはバックスだというから、二人でラグビー部に入ったんですよ。ところが、フォワードをやっていた先輩に、「オレがバックスに行くから、お前達はフォワードをやってくれ」と言われ、話が違ってきた。連日スクラムとタックルの練習ばかり恐怖の日々を送ることになってしまいました。実は、僕は中一の時からバンドをやっていたんです。卒業式に初めて人前で演奏したんだけど一度人前でやると、もうやりたくてしょうがない

い。そんな時、高一の終わりに、バンドの仕事が舞い込んできた。仕事が入るのは土日だからとてもクラブなんかやってられない。それで彼を残して僕一人ラグビー部を辞めました。

◎彼は作詞の面でもタケカワさんのよきパートナーとして実力を発揮する。

僕らのバンドは、ビートルズのコピーをやっていました。英語のオリジナル曲をやりたいだけ、なかなか英語の詩が書けないでいた。ところが、高校二年の英語の時間にいきな

り歌詞のフレーズが浮かび、夢中で作り終えて気がついたら次の時間の授業が終わっていた。たわいのないラブソングなんですけど、やっと最初から英語で作った曲ができた。「やった！」と思って彼に聴かせたら、「オレも書いてみようかな」って言って、すぐに歌詞を書いて持ってきた。これがまたいいんですよ！

高三の時、アメリカからの留学生クロードイアのお別れパーティによばれ、二人で曲を作っていた。ぼくのは「Byebye Claudia」っていう曲で、彼のは「We shall a wave goodbye to you」。手をふってさよならしようっていう曲なんです。かつこよかったなあ。思えば彼は英語の成績がずっと5で、ぼくは3と3だった。

◎そして二人は東京外大に進学。彼との創作活動を経てタケカワさんはプロデビューを果たす。

僕が東京外大の一年の時に、一人でコンサートを開いたんですよ。その時に僕が「組曲をやりたい」って彼に言ったら、「Pieo Block」という名前の組曲を書いてくれました。プロックを積むとまた崩れてしまふ。それも人生……みたいな意味でね。この曲は、後にゴダイゴの最初のアルバムに収録されています。また、デビュー作のソロアルバムには、彼が二曲、歌詞を書いてくれました。

僕にとつての創作は、彼と二人で始めたようなものです。最初のアルバムを出した時に「高校の授業中に作っていたものが、結局こんなになっちゃったよね！」って、二人で大笑いしたことを思い出します。

その後、彼は他のアーティストの詩を書いたりしていましたが、就職を機にやめたようです。本当におもしろくてすこいやつでしたね。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

●OECDやIEAが昨年実施した国際学力調査の結果、日本の高校一年生の読解力や、小・中学生の理科・数学の学力が低下傾向にあることがわかった。文科省は早速、学習指導要領や授業時数を見直すという。そのまえに、日本の教育がめざしている学力との関わりの中で、結果の内実を十分分析することが必要であろう。

●臨時増刊・新潟県中越地震お見舞い号(本誌p.3ご参照)の中で宮城まり子先生は、「想像するのは、雨や地崩れした土地、叫んでいる故郷。なんとつらいことでしょう」と心を痛めておられる。気持ちを一つにして、災害とたたかっておられる被災地の皆様が、一日も早く平穏な日常を取り戻されるようお祈りしたい。